

手に映る脳、脳を宿す手

手の脳科学 16 章

Göran Lundborg ● 原著

砂川 融 ● 監訳

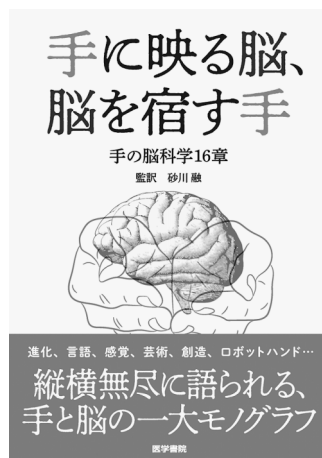
〔評者〕 平田 仁 (名大教授・手の外科)

本書の主役である「手」のことを深く理解する人はどれほどいるだろうか？ 手はとても身近な器官であり、ほぼ全ての所作にかかわり、営みのあらゆる場面を支え、そして、「第2の目」と称されるように貴重な情報収集源ともなっている。人々は「手の価値」を問われれば異口同音に「大切」と即答するだろうが、その際羅列される根拠の大半が「手」からすれば実に過小で心外なものであろう。この状況は「空気」、「水」、「伴侶」、など、あまりにも身近であるが故にことさらに考えることを忘れがちなものに共通する。「脳」は異なるもの、まれなものへの分析が大好きだが、当たり前のものへの敬意は総じて足りない。「あって当然」であり、「居ることが当たり前」なものは失って始めて真の価値に気付かれ、深い洞察の対象となるのである。

本書の原題は『The Hand and the Brain: From Lucy's Thumb to the Thought-Controlled Robotic Hand』と随分潤いを欠くものである。これに対する邦文タイトル『手に映る脳、脳を宿す手』はとても神秘的で、読者の好奇心をくすぐるものとなっている。タイトルは本の顔であり究極の要約であるが、原書と訳書でこれほどにタイトルのテイストが異なる背景には砂川融先生をはじめとする本書の翻訳にかかわった全

ての人の読者へのある種の込められた思いがあるのだろう。

本書を手にする方の大半はこの世に「Hand Surgery (手外科)」という外科分野が存在し、わが国にも1,000名を超える手外科専門医が居ることを知らないだろう。本書の著者 Göran Lundborg 先生と本書を監訳した砂川先生はいずれも現代を代表する手外科医である。「手外科」は2度の世界大戦により生まれた大量の障害者の機能回復を目的に米国陸軍がリードして国策により設置した外科領域であり、「手」の繊細かつ高度な機能を回復させるには整形外科/形成外科/血管外科の三領域をまたぐ外科技術の開拓が必要との認識に基づいて1945年に始まった新興外科分野である。1mm以下の細かい血管や神経を操作する微小外科技術を開拓し、麻痺により失われた機能を再構築する多様な外科治療を創造してきた。1945年当時はいかなる外科医も寄せ付けず no man's land とすら形容された手の重度損傷治療も今日ではリーズナブルに回復させることができる。このように長足の進歩を遂げた「手外科」であるが、奇しくも砂川先生が訳者前書きで吐露したように、「動く手は再建できても究極の目的である『思い通りに動く手』を再建できない」とのざんげは全ての手外科関係者が共有するものである。「手」は脳の



延長、外部の脳、そして魂の鏡とも表される。「手」の役割はマニピュレーションに留まらず、思考を助け、意思伝達を担い、目や耳と相互補完して脳に世界をピピットに映し出す。従来の手外科に欠けていたのはここへの配慮であり、ここに訴求しないと本当の手を回復できないのである。Lundborg 先生が人類学からロボテックスに至る広範な話題を通して紹介する「手」の実像は手外科医としてのざんげから出立した科学の旅路で拾い集めた情報に基づき描かれたものであり、われわれが Brain Science Based Hand Surgery と呼ぶ次世代手外科に礎を与えるものである。難解な専門用語を意図的に排除してわかりやすく紹介されるめくるめく手と脳の関係は医療に関わりのない一般の読者にも十分に楽しめるものだろう。本書を通してともしれば忘れがちな「手」を多くの皆さんに深く再考していただきたいと思う。

A5・272頁

2020年9月

定価：本体3,600円＋税

[ISBN978-4-260-04257-4]

医学書院 刊